

わたしたちのふるところ西条の偉人

いよせいじん
伊予聖人

こんどうとくざん

近藤篤山



西条市教育委員会

はじめに

愛媛の人々は、昔から心を大切にする文化を生み出してきました。世の中のために、すぐれた仕事をした人もたくさんいます。

江戸時代、伊予国（愛媛県）に三人の立派な学者がいました。この人たちは少年のころから大きな夢を持ち、苦しみや困難とたたかって、ついにその夢を实らせた人たちです。



中江藤樹（一六〇八～一六四八）

は、若いころ藩主に従って大洲に移り住み、勉学に励みました。その後、故郷の近江国（現在の滋賀県）

で人々の教育にあたり、身分をこえた教えと徳の高さから「近江聖人」と称えられました。



尾藤篤山（一七四七～一八一三）

は宇摩郡川之江村（現在の四国中央市）に生まれ、大阪で漢学（中国の学問）を学びました。後に幕府

に用いられて、江戸の昌平黉（当時の日本一の学校）の先生となり、「寛政の三博士」の一人といわれました。



近藤篤山（一七六六～一八四六）

は宇摩郡小林村（現在の四国中央市）で生まれ、大阪で尾藤二洲に学びました。小松藩（現在の西条市小松町）

で、藩の人々の教育を行い、その誠実な人柄は多くの人慕われて、「伊予聖人」と呼ばれました。

ここでは、三人の中から、私たち西条市にゆかりの深い、伊予聖人近藤篤山について学びたいと思います。

篤山とくざんの生おい立たち

近藤篤山（本名 近藤高太郎たかたろう春崧はるたか）は、明和三年（一七六六）、宇摩郡小林村（現在の四国中央市土居町小林）で生まれました。篤山というのは、後の学者としての名前です。

父は高橋甚内たかはしじんないといって、学問もあり立派りっぱな人でした。また高橋家は、農業のかたわら薪まきや炭すみの商あきないもする、裕福ゆうふくな家庭でした。篤山みょうじの名字が父とちがうのは、篤山が祖父そふの生まれた近藤家の名前を継いだからです。

篤山が六歳さい、弟の容斉ようさいが三歳のとき、二人に悲しいことがおこりました。母が父と別れて実家じっかに帰ってしまったのです。幼い兄弟のさびしさは大変なものでした。





そんな兄弟の心の支えになつてくれたのは、十
三歳の叔母（父の妹）でした。叔母は、炊事、洗濯
など一家のすべての世話をし、二人の面倒を見て
くれたのです。やさしい叔母のおかげで、しばら
くは家族にもおだやかな日々が続きました。

しかし篤山が十歳のころ、再び不幸が訪れます。
ひどい日照りや洪水が続いて田や畑で作物が取れ
ず、村の人々の暮らしがだんだん苦しくなつてき

たのです。

篤山の家も商売がうまくいかず、品物を売った
お金や、貸したお金も払ってもらえずに、生活が行
きづまつてきました。

「貸したお金は払ってもらえなくても、借りたお
金は返さなければならぬ」父は祖父と相談し、
屋敷を売って借金を払い、使用人たちには田畑を
分け与えて何とか暮らしていけるようにしました。

篤山一家は無一文になりましたが、父が別子銅
山の役人として働くことになり、家族五人は、住
みなれた小林村をあとしたのでした。

銅山役人の給料は安く、仕事はともきびし
いものでしたが、父はけんめいに働きました。凍え
そうな寒い夜でもみんなを励まし、どんなむずか
しい仕事もひるまずに、がんばったのです。そん

な父を銅山の人々は次第に慕うようになりました。そして篤山が十五歳のときには、氣以という新しい母親も来て、一家は仲むつまじく暮らしていたのです。

しかし、父にはひとつの悩みがありました。それは山中の生活のため、二人の子どもに十分な学問をさせてやれないということでした。兄弟は近くのお坊さんや神主さんについて学んでいましたが、一生けんめいに学ぶ二人を見るたび、「よい先生のもとで思うぞんぶん勉強させてやりたい」と考えるようになりました。

旅立ち

篤山二十三歳のとき、兄弟は大阪にある尾藤二

洲の塾で学問の修行をすることになりました。母親の氣以も一生けんめいに内職をしてお金のため、兄弟に旅費を出してくれたのです。決して余裕があるわけではない生活にもかかわらず、大阪に出してくれる両親の思いを深く胸に刻み、篤山兄弟は固い決意で別子銅山を旅立ったのでした。





二洲塾に入った篤山兄弟は、死にものぐるいで学問に打ち込みます。学費が少ない中、そまづな着物で冬の寒さをしのいで、十分食べるものもない日々を、お粥やおからで飢えをしのぐなど、それはすさまじいものだったのです。

やせおとろ

えた篤山の姿
を見るに見か

ねた友人の

越智高州は、

二洲先生に頼

みました。

「先生、篤山

はこのままで

は死んでしま

います。どうか助けてやってください」

高州の友情のおかげで、篤山は先生の塾に住み込むことを許されました。生活の心配がなくなつた篤山はますます学問に精を出し、三年後には、「二洲塾に篤山あり」といわれるほどになりました。

江戸へ

篤山が二十六歳のとき、二洲先生が幕府の学問所である昌平黉の先生として、江戸へ行くことになりました。篤山は高州とともに大阪に残り、二洲塾を引き継ぎました。

しかし心の中では、江戸に行つて勉強をしたくてたまりません。そんなとき、二洲先生から「江

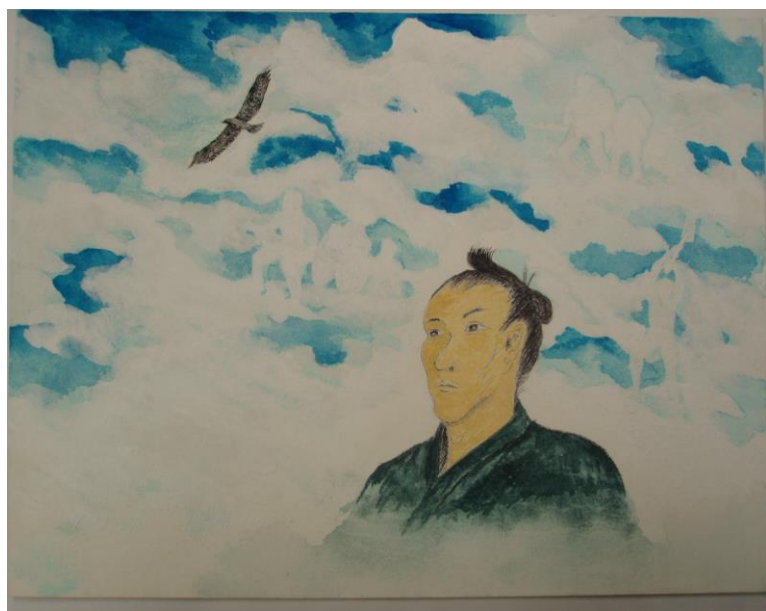
戸へ出てきなさい。そして、もっと勉強したらどうですか」という手紙が届きました。

郷里きょうりの父も「わしらのことは心配せず、しっかり勉強しなさい」と言ってくれました。篤山とくざんはそんな父や先生の思いやりに感謝し、江戸へ旅立ったのでした。

日本一の学校・昌平黌しょうへいこうに入学した篤山は、けんめいに勉強に励はげみました。やがて、篤山の学問とすぐれた人柄ひとがらは先生方がたに認められ、友人からも尊敬そんけいされて、将来しょうらいは昌平黌の先生に、と期待きたいされるようになりました。

しかし篤山は、学問をすればするほど「自分の学問は、地位ちいや名誉めいよを得るためのものではない」と考えるようになりました。

ふるさとを出てから十年、決して忘れることの



帰かえって孝行こうこうをしたい、篤山の思いはつのるばかり

でした。

二洲先生にしゅうは引き止めますが、三十二歳のとき、篤山はついに昌平黌の先生になることを断ことわり、ふるさとへ帰る決心をします。

なかったのは、年老としおいた両親のこ
と。これ以
上、別子べっしの
山中で苦勞くろう
させるわけ
にはいかな
い。一日も
早くそばへ



塾を開く

両親のもとに帰った篤山は、川之江に塾を開き、若い人たちの教育を始めることにしました。川之江は二洲先生のふるさとです。先生は篤山の才能と人柄を惜しんで、何度も手紙をくれました。

「このたびは、川之江に塾を開くとのこと。江戸から遠く離れるのは残念なことですが、私のふるさとにとっては大変ありがたいことです」弟子への思い、川之江への思いがこもる二洲先生の手紙です。

塾は、篤山の教える学問と、その人柄を慕う青年たちの熱気で、あふれていました。塾のあった場所は、現在の四国中央市川之江町新町で、今も「近藤篤山塾跡」の石碑が建っています。

先生や友だちと別れて江戸をたち、郷里までの三百里（約千二百キロ）、一步一步、自分の学問や、父母への想いを深めながら、別子銅山に帰っていく篤山でした。



塾 跡 の 碑

篤山とくざんの教え

のすばらしさは、

やがて小松藩・

七代藩主一柳

頼親公よりちかこうの耳へも

川之江かわのえの塾をやめて大生院に移り、両親のもとから小松まで通う日々が続きましたが、三年後には屋敷やしき（現在の近藤篤山旧邸きゅうてい）をもらって、一家で小松に移り住んだのでした。

小松藩の教育のために

届きました。当時の小松藩には竹鼻正脩たけはなせいしゅうという学問のすぐれた奉行ぶぎょうがおり、正脩と頼親公は、篤山をどうしても小松に迎えたいと思ったのです。

小松藩の頼みたのみを、はじめは断り続けていた篤山でした。しかし正脩の熱意ねついや江戸の二洲先生にしゅうのすすめ、また役人の勤めつとを終えた父が、小松藩の領地りょうちであった大生院村おおじょういん（現在の新居浜市大生院）に住んでいたこともあって、三十八歳のとき、ついに藩主はんしゅの先生として、小松藩に招かれることになりました。

小松藩に招かれた篤山は、藩校「養正館ようせいかん」の教育の充実じゅうじつに努めつと、すべての藩士はんし、その子弟しでいまで、けんめいに教えました。その学問の深さと誠実な人柄ひとがらは、たちまち領内りょうないの人々の尊敬そんけいと信望しんぼうを集めました。

また篤山は、役人や庄屋しょうやを集めて人の道を説き、それをお百姓ひやくしやうさんたちにも広げるようにしました。そして、何事なにごとにも自分の立場で精一杯せいいつぱい励むこ

と、一人ひとりが自分の行い^{おこな}を慎む^{つつし}ことなどの
教えが広がったのです。小松の領内^{りょうない}では、どろぼ
うでさえ入ることをためらったとも言われていま
す。篤山^{とくざん}の名は小松藩以外にも広まり、遠くから
学問^{がくもん}を志す若者が、篤山のもとに集まりました。

こんな話が残っています。

安藤^{あんどう} 彰^{あきら}という弟子がいましたが、あるとき、
ひどい伝染病^{でんせんびょう}にかかってしまいました。知らせを
受けた篤山は急いでかけつけ「彰ほどの者がこれ
くらいの病気でへこたれてどうするのだ」と励ま^{はげ}
しました。

伝染病なので、家族も近づこうとしません。し
かし篤山は、そんな家族を指図^{さしず}して、けんめいに
介抱^{かいほう}したのです。そして毎日、塾が終わるとすぐ





に彰^{あきら}をたずね、手^て厚^{あつ}い看病^{かんびよう}を続けました。彰はついに病気に打ち勝ち、命を取りとめたのでした。

後に篤山^{のちとくざん}が年老^{としお}い、病^{やまい}の床^{とこ}に伏^ふしたとき、彰はかた

時もそばを離れず、看病しました。しかし、そのかいもなく篤山は亡^なくなりました。

「先生が私にしてくださったことは、親が子を思う以上のものであったのに、私は先生に何のご恩^{おん}も返すことができなかった」と彰は泣いて語^{かた}ったそうです。

篤山は、小松に招^{まね}かれてから亡くなるまで、四十年以上にわたり、藩^{はん}の教育に尽くしました。昼は養正館^{ようせいかん}等で講義^{こうぎ}をし、夜は自宅の塾で、弟子の指導^{しどう}にあたりました。藩主^{はんしゅ}の先生としての勤め^{つと}はもちろん、政治^{せいじ}の相談にもものるほど信頼されたのです。

篤山の指導によって、江戸の昌平黉^{しょうへいこう}へ進学して立派^{りっぱ}な学者になる者、藩内で政治に活躍^{かつやく}する者など多くのすばらしい人材^{じんざい}が育ちました。そして小松藩は、伊予八藩^{※いよはちはん}の中でも最も充実^{じゅうじつ}した藩としてすぐれた政治を行い、中央で活躍する多くの人物を送り出しました

※伊予八藩（西条・小松・今治・松山・新谷^{にいや}・大洲^{おしづ}・吉田^{よしだ}・宇和島の八藩）

兄弟の力で

篤山とくざんの弟容斉ようさいも、兄どうようと同様にけんめいに学問に励はげみました。二十九歳のときに西条藩さいじょうはんの三品家みしなの養子ようしとなり、藩校「擇善堂」たくぜんどうの先生として、西条藩はんしの藩士たちの教育を行つたのです。

篤山が小松藩に招まねかれてからは、兄弟はとくに親しく、いつも行き来いききをしあうようになりました。

そのころ、西条藩と小松藩の間に石鎚山いしづちの信仰しんこうをめぐる争あらそいがあり、幕府や京都御所の仲裁ちゆうさいも効果がなく、解決しないまま長い年月が過ぎていました。小松藩は困こまつて篤山に相談しました。篤山は容斉と協力し、連絡を取り合つて、藩同士どうしが仲良く話し合いができるようにしました。

西条藩と小松藩は、もとは兄弟の藩でした。そ

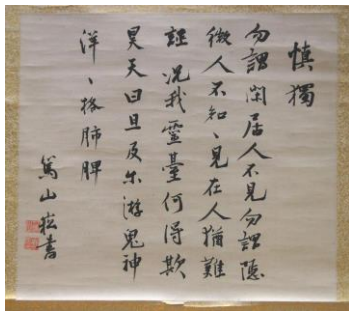
の上に、どちらの藩の重要じゅうような地位の役人にも、篤山兄弟の弟子たちがいました。

両藩は、お互い譲り合いながら穏やかおだに話し合いを進めました。そして、ついに七十年ぶりに争かいけついが解決したのです。人々は篤山兄弟をますます信頼し、尊敬そんけいするようになりました。

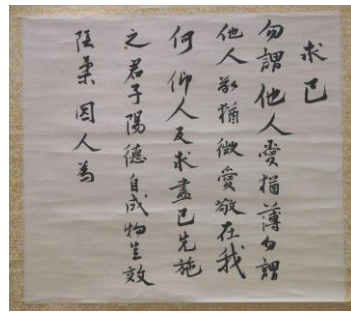
篤山の教え

篤山の教えには、「三戒」さんかい「四如の喩」しじよ たとえなどがあります。

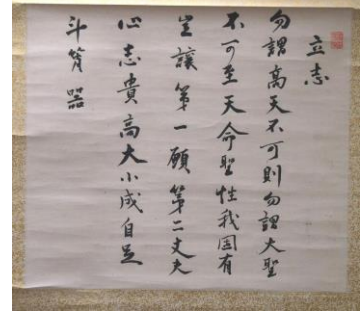
三戒とは、立志りっし、求己きゅうき、慎独しんどくの三つで、「人は生まれもった才能さいのうを高めるため、さらに勉強しなければならぬ。失敗しても人のせいにならず、自分に悪いところがなかったか反省しなさい。他人



慎 独



求 己



立 志

が見ていても見ていなく

ても、同じ態度でいなく

ればならない」という教

えです。

四如しじよの喩たとえは、おもに

「目上めうえの人にはきちん

とし、お客さんは大事に

もてなすことを、いつも

忘れずにいましょう」と

いう内容で、女性に対し

ての教えですが、その精

神は、男女に関係ない、

人への接し方せつ かたとして、今

でも通用つうようするものです。

両親への思い

篤山とくざんが父親をしのんで書いた文の中に「寒さが

きびしく、指が凍こるほどの冬の夜でも、父は見回みまわ

りを一度も休まなかった。銅山の職人しよくにんを励はげました

めに、どんなに風が吹きすさび、雪が降りしきろ

うとも、少しもしり込みごすることはなかった」と

あります。

銅山の冬はとてもきびしいのですが、凍傷とうしょうで

指が落ちるような寒い夜でも、一生けんめい勤め

に励んで、学資がくしを送り続けてくれた父の苦勞くろうを忘

れることはなかったのです。

また篤山は、大阪の苦学くがく時代のことを次のよう

にも書いています。

「自分たち兄弟が、一人前の学者として世よに立た

つことができたのは、すべて子どもたちの将来を考えた両親のありがたい心づかいによるものである。そのことを思うと、どう恩返しすればいいのか」

篤山は父母の亡くなった後も、決してその真心と教えを忘れることなく、親の恩にむくいようと努力したのです。

篤山の人生は、両親に対する真心でつらぬかれていたと言ってもいいでしょう。

生涯稽古

篤山は六十五歳のころ、「篤」の字を、「竹」と「馬」の上下に分けて、「竹馬老人」と名乗りました。年をとっても少年の気持ちを忘れず、いつま

でも勉強に励み、自分をきびしく鍛えたいと思いかからでした。篤山の一生は自分に打ち勝つ努力の連続だったと言えるかもしれません。

篤山は、亡くなる直前までたくさんの書物を読み、弟子たちに学問を教え続けました。

篤山の、こうした学問への心構えや両親への感謝の心、そして何よりも地位や名誉にとらわれず、人間らしく誠実に生きようと努力する姿は、生涯変わることはありませんでした。そのような篤山を、人々は「伊予聖人」と呼ぶようになったのでした。

今につながるもの

伊予小松駅から南へ五百メートルほど行くと、左側に近藤篤山旧邸があります。広い庭と立派な門のこの屋敷に江戸時代、近藤篤山が住み、多くの弟子たちを教え育てたのです。

さらに南に五十メートルいくと、藩士たちを教えた藩校「養正館」の跡も残されています。そして、市立小松温芳図



小松小学校の立像

書館では、篤山に係する多くの資料を見ることができます。また、小松小学校の校門の脇には、篤山と母親の立像や



石根小学校の児童たち

「立志」と書かれた校訓碑などがあり、小松小学校や石根小学校では、今も授業で篤山のことを学習しています。

とくに石根小学校

では、篤山が好んだという「篤山椿」で、篤山の教えをつないでいこうと、その苗木を育てる運動を行っています。このように、今でも篤山の教えは人々の心に生き続けているのです。

篤山の墓は、県立小松高校へ登る坂の途中にあります。今でもそこから、私たちのふるさとを静かに見守っているかのようです。

養正館跡



小松藩陣屋跡



篤山先生の
足跡を訪ねて

西条市立
小松温芳図書館



P

近藤篤山旧邸



P



西条市
小松公民館

西条市
小松サービスセンター



← 高松

国道 11 号

松山 →



J R 伊予小松駅

みなさんへ

この世に生を受けて、ふるさとを持たないものは一人もいません。私たちの郷土は、何千年もの昔から、先人たちの汗と努力の歴史が繰り返され、発展してきました。

私たちの中には、そうした先人の尊い血が流れています。その血を受け継ぎ、先人たちが作りあげてきた郷土の文化を守り育て、子孫に伝えていかなければなりません。

ここに取り上げた近藤篤山先生は、小松藩の儒学者で教育者でもあり、学問の深さ、優れた人柄から多くの人に慕われ、伊予聖人と尊敬されました。その教えは今も人々の心につながっています。ともすれば、人間としての値打ちや生き方を見

失いがちな現代の子どもたちが、少しでも篤山先生の努力、優しさ、情熱に触れ、人はどう生きるべきかを学ぶことができれば、これほどすばらしいことはありません。

この冊子は、平成二十年度から西条市が実施している「近藤篤山顕彰事業」のひとつとして企画したもので、愛媛県教育会「愛媛子どものための伝記」第六巻（近藤篤山）を参考に、篤山先生の生涯を紹介したものです。

内容については、まだまだ不十分な点もあろうかと思いますが、篤山先生について理解を深めるときっかけにしていただけだと存じます

最後に、本冊子の作成にあたって、ご協力をいただいた皆様方に、心より感謝申し上げます。

西条市教育委員会

篤山先生の生涯

明和三年	一七六六	宇摩郡小林村に生まれる。
安永四年	一七七五	凶作が続き、家が破産する。父が別子銅山の役人となり、一家で別子山に移る。
天明二年	一七八二	天明の大飢饉（一七八七）
天明七年	一七八七	松平定信による寛政の改革が始まる。（一七九三）
天明八年	一七八八	大阪の尾藤二洲の塾に入門する。
寛政三年	一七九一	尾藤二洲が江戸へ赴き、昌平黌の教官となる。翌年、弟容斉とともに大阪で塾を開く。
寛政六年	一七九四	度重なる二洲の招きにより、昌平黌に入門する。
寛政九年	一七九七	別子山に帰郷する。翌年、川之江に塾を開く。
享和二年	一八〇二	父が銅山役人を引退し、大生院村に住む。
享和三年	一八〇三	小松藩主より招きを受け、藩校「養正館」の儒官となる。三年後に小松に移住、以後四十年にわたり、藩士、庶民を教育し、徳行を広める。
天保十二年	一八四一	水野忠邦による天保の改革が始まる。（一八四三）
天保十三年	一八四二	七十七歳で引退。この年江戸幕府より表彰される。
弘化三年	一八四六	八十一歳で没す。

参考文献

- 「愛媛子どものための伝記」第六巻「近藤篤山
渡部盛幹 愛媛県教育会 昭和五十九年
「近藤篤山 小松の文化と教育」
小松町教育委員会 平成十二年
「西條人物列伝」
西條郷土史研究会 昭和六十一年
「小松藩会所日記」 西条市教育委員会所蔵

協力

- かわのえ高原ふるさと館（愛媛県四国中央市）
暁雨館（
近江聖人中江藤樹記念館（滋賀県高島市）

わたしたちのふるさと西条の偉人 伊予聖人近藤篤山

編集・執筆 ※平成二十一年十二月当時

■本文

重松二郎（小松史談会会長）
黒川雅子（愛媛・小松つばき会会長）
辻中 薫（小松文化協会会長）
石丸敏信（西条市文化財保護審議会委員）

■題字

辻中 薫

■さし絵

國田典良（西条市立神拝小学校校長）

■監修

渡部盛幹

発行

平成二十一年十二月（初版）
平成二十八年六月（第二版）
令和三年三月（第三版）
令和八年一月（電子版）

※電子版作成にあたり、一部内容を変更しました。

西条市教育委員会

西条市明屋敷一六四番地

TEL（〇八九七）五六―五一五一

三幅対



養正館の床の間に掲げられていた、篤山の教育精神を表した書である。（市指定文化財）

居天下之廣居

仁 天下の広居に居れ

立天下之正位

礼 天下の正位に立て

行天下之大道

義 天下の大道を行け